



ニッカウヰスキー（株）
門司工場倉庫（旧大里製粉所倉庫）

門司に鈴木商店が進出したことは、この街に大きな変革をもたらしました。ある時期は「日本一の総合商社」と謳われるほどの影響力を持つ企業でした。この地区には鈴木商店にまつわる多くの煉瓦建築が立ち並び、現役で活躍している工場もあります。



旧サッポロビール九州工場
（倉庫）

門司に集まる豊富な石炭と労働力、良質な水、交通の利便性に着目した鈴木商店は、この地に帝国麦酒株式会社（のちのサッポロビール株式会社）を設立します。当時はまだ九州・四国にビール工場はありませんでした。



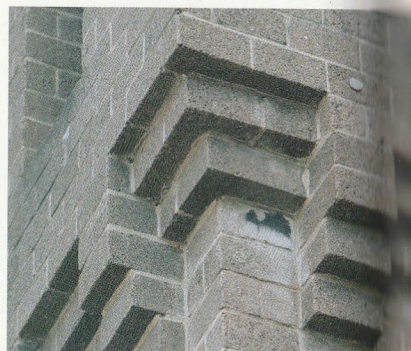
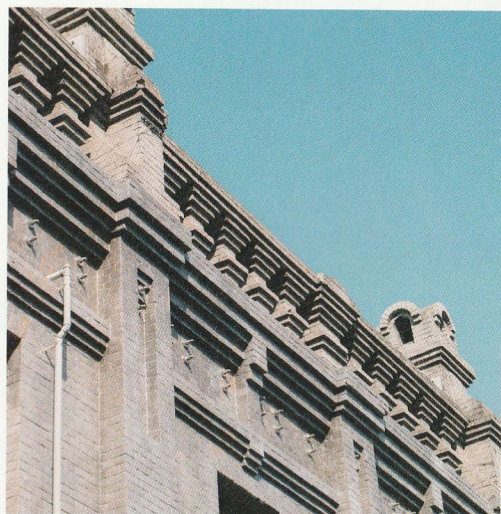
総合商社、 鈴木商店の足跡





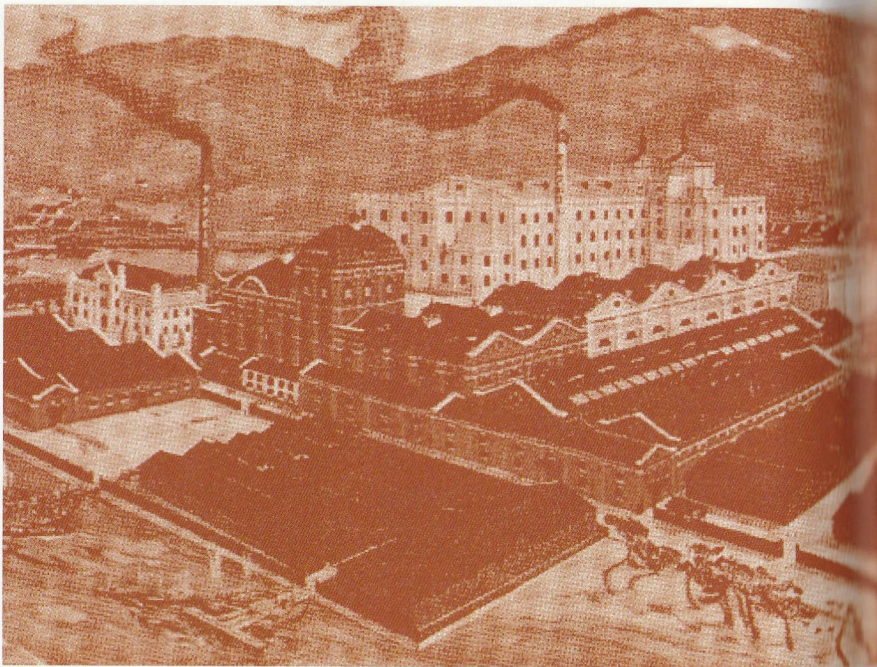
旧サッポロビール九州工場
事務所棟（62P）醸造棟（63P）

ここで醸造したビールは門司から国内外へと出荷され、日本のビールは「サクラビール」と世界に称賛されました。最盛期には国内シェア約9%、国内第3位となり、東京や大阪にもその名のネオンが灯されました。現在は「門司赤煉瓦ブレイス」として整備され、お酒を飲めるお店も入っています。



九州初の
ビール工場がこの地に





1925(大正14)年の帝国麦酒給葉書(鈴木商店記念館提供)

たから なりわい まつりごと

資源から工業が生まれ、政治が定められると、そこに街が形成され始める。そして、そこにはまた新たな産業や生活、文化が生まれていった。

門司港「黒モノから白モノへ」

製鐵所の誘致を八幡・洞海湾に譲り、門司は港湾都市としての機能を強化しました。九州と本州を結ぶ重要な拠点であり、また海外との貿易拠点でもあった門司港は、製粉や砂糖、ビールや酒精、塩やセメント、バナナや穀物、そして相場や金融などの扱いが活発となります。これは「黒モノ(工業品)から白モノ(商業品)へ」という言葉に象徴され、なかでも門司・大里地区に進出した鈴木商店は製糖所や製粉所、ビール工場などを設立し、その隆盛の一部は煉瓦建築として今の門司にも姿が残されています。

鈴木商店の隆盛

明治から大正にかけて、鈴木商店は門司・大里の臨海部に大里製糖所をはじめ、製粉所(現・日本製粉)や帝国麦酒(現・サッポロビール)、酒精製造所(現・ニッカウキスキー)、神戸製鋼所、ほかにも製塩所や精米所などが集まるコンビナートを形成しました。鈴木商店の事業は対岸の下関にまで及び「関門海峡は鈴木王国」と称されるほどになりました。特に1913(大正2)年に九州初のビール工場である帝国麦酒によって醸造された「サクラビール」は、門司から出荷されて国内外で人気を博し、最盛期には国内シェアの約9%を誇りました。旧サッポロビール九州工場の赤煉瓦建築群は、現在「門司赤煉瓦プレイス」として保存され、ビール文化や歴史を発信する場となっています。

「水」の門司

門司地域にビールや砂糖、そのほかの多くの商品を製造するコンビナートを築くこととなる要因の一つに、良質の水源が確保できたことがあります。この地域の水は良質で知られ、国際港である門司の船舶給水にも利用されていました。函館、横浜、神戸港と並んで「赤道を越えても腐らない水質」と評判になるほどでした。1911(明治44)年に小森江浄水場、1923(大正12)年に小森江貯水池が完成し、供給された水は地域の産業や生活の基盤を向上させる上で重要でした。小森江貯水池には当時の姿のままの取水塔が現存しており、煉瓦積みの高い耐久性と美しいデザインを確認することができます。

石原煉瓦と猿喰新田

鈴木商店ができる大里地区を山で隔てた周防灘側の猿喰は、江戸時代の「享保の大飢饉」の際、大里村の庄屋であった石原宗祐が私財を投入して猿喰新田の開発を行った地です。新田は多くの農民を救いました。そして明治期には、その地の一角で煉瓦製造が行われていました。庄屋石原宗祐の家系の6代目・石原廣義が石原煉瓦工場を1890(明治23)年に創業。年間数百万個の煉瓦を製造し、現在の九州鉄道記念館などに用いられました。